

赤米ニュース

第282号

(2020年9月30日)



東京赤米研究会

〒186-0005 東京都国立市西3-7-29 アゼリア国立2-101 長沢方 (Tel042-577-6855)

9月の赤米作り-----	2253
おしらせ -----	2255
おたより -----	2258
小学生のための赤米講座 (Ⅲ) ----- 長沢利明	2259
表紙解説：東京の祭り⑨—芝大神宮のだらだら祭り (港区) — -----	2259

[2020年版赤米栽培マニュアル]

9月の赤米作り

●9月の赤米稲作りのポイント

赤米作りも、いよいよ最終段階に入ってきました。今月は赤米稲にも花が咲いて、稲穂が稔り始めます。豊かな収穫の秋を迎えるために、今回は出穂・開花期の諸注意を解説しておきましょう。

●出穂・開花期の赤米稲

赤米稲の出穂・開花はたいていの場合、9月初旬頃にいっせいに始まり、いっせいに終わります（品種によっては7～8月に開花するものもあります）。苗の草高はこの時点ですでに1mを越え、1m20cm～1m50cmほどになっていますが、茎の先端に細くて短い、槍のように尖った最後の葉が、1枚あらわれます。これを「止め葉」といい、これが出てくると、いよいよ出穂が始まるサインです。出穂の当日朝、止め葉の根元から稲穂が伸び出しますが、赤米稲の穂には長い芒があるので、まずはその芒の先端が姿をあらわします。赤く細いブラシの毛のようなものが、茎の先から飛び出しているのが見えたら、いよいよ出穂の始まりです。

ものの2～3時間で、穂はスルスルと伸び出して完全に止め葉の根元から離れ、ピンとまっすぐに立った状態で、その全容をあらわします。時には長い芒が茎の先端部にひっかかって、うまく出穂できないこともありますが、人間が手伝ってやらなくとも、自然に内側から押し出されていきますので、放っておきましょう。農家では稲穂を傷つけることのないようにと、出穂・開花時には決して田



写真9 赤米稲の開花

に入らないそうです。

1本の稲穂は、この日の夕方までには出穂が完了し、早いものではその日のうちに開花を始めますが、たいていは翌朝から花が開きます。穂の上の方から蕾が縦に割れ、中から白い雄しべが外に飛び出します（写真9～10）。開花は上から下へと順に進んでいきますが、ひとつの花の開花時間はわずか1時間ほどで、すぐに開花が終了します。とはいえ、1本の穂にはたくさんの花がついていますから、上から下へと次々に順番に開花していくので、つねにいくつかの花が開いており、1～2日間は開花を観察することができます。一つ一つの花は開花中に自家受粉をおこない、雄しべの花粉が雌しべに付着して受粉がおこなわれるのです。こうして受粉を終えると花は閉じ、あとは結実・登熟へと向かいます。このように、赤米稲の出穂・開花はほぼ同時進行

でおこなわれていきます。

●出穂・開花期の水の管理

出穂・開花期のミニ田んぼの水位は最大限にまで上げ、たっぷりと水を入れてやりましょう。この時期の水不足・土の乾燥は禁物です。プランターやバケツの水漏れがないかどうか、よくチェックして、つねに水を深く満たすようにしてやって下さい。

赤米稲の稲穂は、開花後4～5日で穂がばらけ、傾いて垂れ始めます。さらに10日もたちますと、すっかり実が入って稲穂が重くなり、ダラリと垂れ下がります。すべての稲穂が垂れ下がり、十分に実が入ると、もう田に水は不必要です。ミニ田んぼの水を完全に落とし、田を干して下さい。その後は、稲刈りの時の水田の土の状態に持っていけばよいのみで、これ以降はミニ田んぼにまったく水を入れなくて下さい。赤米稲の稲穂は、開花後1ヶ月で完全に実が熟しますので、ようやく稲刈りを行うことができます。

●品種別の隔離

さて、ここで気をつけねばならないことがひとつあります。それは赤米稲の各品種の花粉が混じり合って交雑することのないように、それぞれのミニ田んぼを互いに離して隔離するということです。複数の品種を同時に栽培しておられる方々は、出穂・開花が始まったならば、ただちにその措置を取って下さい。プランターやバケツを移動させ、互いにそれぞれの品種が隣接しないように、離して置いて下さい。

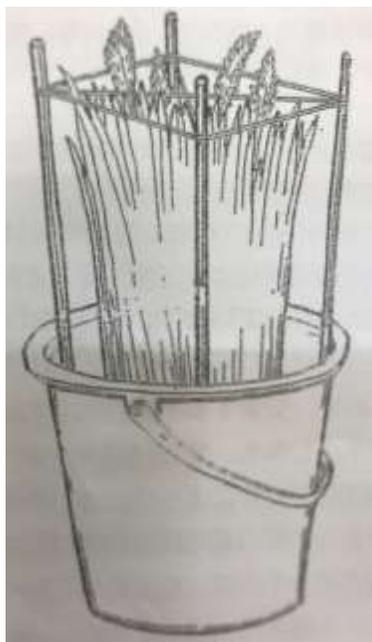
かつて通常稲の水田には赤米がよく混入し、それを根絶するために農家は非常に苦心を重ねてきました。品種どうしの隔離が不徹底

ですと、そのようなことも起こり、湿地の深田や寒冷地での稲作に大きく貢献してきた赤米稲が、悪者・雑草扱いされてしまう結果をもたらしました。そこで私たちもまた、品種別隔離をきちんとやっておく必要があるわけなのです。

通常稲の田への赤米の混入現象は、実際には両者の交雑によって生じることはほとんどないといわれています。赤米稲は通常稲よりもずっと早い時期に開花し、開花期が重ならないので、交雑する可能性はきわめて低いわけですが、しかも、すでに述べたように、稲の生殖は自家受粉によってなされるものですし、ひとつの稲の花の開花時間はわずか1時間に過ぎず、その間に他の株の花粉を雌しべが受粉する機会（まったくないとはいえませんが）、まずほとんど起こらないといつてよいのです。とはいえ、万一の可能性に備えておくということは大切で、品種間の交雑を防止し、品種の純血性を保つためにも、隔離をおこなう必要があるわけなのです。また、隣り合うミニ田んぼの赤米稲からこぼれた種子が、土の中にまぎれて残存することもありますから、それをふせぐためにも隔離は必要です。

赤米は野生稲・雑草特有の性質を持っていて、その実は非常に脱粒性が高く、ぼろぼろとこぼれて散りやすいのです。田の土に残された赤米の種子が翌年発芽し、別品種と混じりあうことも考えられます。特に種子島種や武蔵国分寺種などは非常に脱粒性の高い品種ですので、収穫前にかなり多量の種子が穂からこぼれ落ちます。厳重な隔離をおこなって下さい。それぞれのミニ田んぼには、つねに単一の品種のみを栽培するようにし、その純潔性を厳格に維持していただきたいと

図6 風倒防止用の支柱



思います。

●風倒防止対策について

出穂・開花時の防風対策は特に重要です。草高も伸びてますます風害を受けやすくなってきている赤米稲の苗に、強風が当たって茎が傾いたり、倒れたりすることは、何としても避けなければなりません。これは出穂後の苗にかぎらず、その直前の穂ばらみの段階についてもいえることで、いったん風で倒れた稲はまずほとんど結実しませんし、稔ったにせよ中身の無い空籾になってしまいます。台風の接近時に、バケツごと屋内に避難させることはいうまでもありませんが、ミニ田んぼそのものにも風よけ紐を張って、茎や葉が風の影響を受けることのないように、守ってやるとよいのです。あまり強い風の当たらない場所ならば、特にこれをおこなう必要はないのですが、心配であればやって下さい。風よけ紐の掛け方は、各自工夫しているいろや

ってみるとよいでしょう。ここではその一例を紹介します。

これはもっとも簡単な方法で、ミニ田んぼ内に何本かの支柱を立てて間に紐を張り、稲を支えてやるやり方です(図6)。支柱は木や竹の棒を何本か立てればよいのですが、もっとも具合のよいのは朝顔などをからませるための、園芸店で売っているあの緑色の園芸用支柱です。紐は荷造り用の紐でよく、支柱の間に張りめぐらせて粗い網状にします。紐を張る高さは、ちょうど稲の穂首の下あたりの位置がよく、あまり低すぎでは効果がありません。稲穂が紐の上に顔を出すくらいの高さが適当です。こうしてやれば、多少の強風でも紐が支えてくれますので、稲が倒れたりすることがありません。

さあ来月には、いよいよ待ちに待った稲刈りを迎えることになります。収穫の秋を、大豊作の喜びで迎えようではありませんか。もう一息ですから手抜きをせず、ラストスパートをともに頑張りましょう！

おしらせ

●多久島 實さん御逝去

当会の古くからの会員で、大阪府大阪市在住の多久島 實さんが本年4月12日に御逝去されました。多久島さんが当会に入会されたのは2000年のことで、今は亡き京都の芦田行雄さんの紹介で当会のことを知り、ただちに入会されました。実にエネルギッシュな方で、ご自宅の庭に大型水槽を何十個と並べ、20品種以上もの赤米稲を毎年栽培され、当会からも多くの赤米品種の種子が提供されました。東京を代表する赤米品種、「武蔵国分寺種」

を初めて大阪の地で栽培されたのは、もちろん多久島さんです。その栽培のやり方は大変ユニークで、近畿地方各地の古代遺跡を自らおとずれては遺跡の土を採取し、その土で赤米稲を育てるというものでした。「古代稲を育てるには、古代遺跡の本物の土が用いられなければならない」というのが、多久島さんの持論だったのです。大変な勉強家でもあり、関西で開催される考古学や古代史関係の展示会・講演会などには欠かさず出席され、そこで入手した書籍・レジュメ資料・図録などを、いちいち当会まで送って下さいました。東京で開催される赤米関係の講演会やイベントについては遠過ぎて出ていかれないので、せめてレジュメとか関連グッズとか、何でもいから大阪まで送って欲しいと要望され、私たちはポスター・レジュメ・チケット・新聞記事・試食会メニューに至るまで何でもお送りしました。多久島さんは、そのたびに大変喜んで下さったものです。自宅での栽培結果やその中間報告、感想などを毎月、頻繁に当会まで寄せて下さり、それらは『赤米ニュース』に何十回も掲載されております。熱烈な「赤米マニア」であったにもかかわらず、すでにかなりの御高齢であったため、ここ数年は体調もすぐれず、長期入院とリハビリの繰り返しで、赤米栽培も長らく中断したままでした。私たちは、20年間にもわたる多久島さんとの思い出を糧としながら、赤米稲の保護・普及・啓蒙・活用のための取り組みを、今後ともさらに発展させていきたいと思っています。多久島さん、今まで本当にありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

●赤米畑の雑草植生調査結果

国分寺赤米会が管理しておられる武蔵国

分寺跡地内の赤米畑では、会員総出で毎週、除草作業がおこなわれております。本年6月18日(木)・7月13日(木)の作業のおり、東京赤米研究会では畑内の雑草群落の植生調査をまた実施致しましたので、その結果を次表にまとめておきます。見ての通り、登場する植物の顔ぶれは、前回調査した東隣の草地

[赤米畑内の雑草群落植生調査結果]

調査地点	①	②
コードNo.	159	160
調査面積 (m)	2×2	2×2
全植被率 (%)	30	30
草本層草高 (m)	0~0.2	0~0.2
出現種数	13	14
オヒシバ	2・2	2・3
ハキダメギク	1・1	2・2
カヤツリグサ	1・2	2・2
ヤマノイモ		+・1
コニシキソウ	1・2	1・1
スベリヒユ	1・2	1・1
カタバミ		+・1
スギナ	1・2	+・1
オニノゲシ	+・1	+・1
アメリカイヌホオズキ	+・1	+・1
ヨモギ		+・1
ヒメオドリコソウ		+・1
スズメノカタビラ		+・1
コミカンソウ		+・1
オッタチカタバミ	+・1	
ドクダミ	+・1	
メヒシバ	1・2	
イヌムギ	1・2	
ネズミムギ	1・1	

注) 調査日: ①2020年6月18日・②同7月13日。



畑の雑草① (オヒシバ)



畑の雑草④ (スベリヒコ)



畑の雑草② (カヤツリグサ)



畑の雑草③ (ハキダメギク)

植生(本誌279号参照)とはまったく異なり、荒地地型群落ではなく、典型的な畑地雑草群落のパターンを示しています。それはすなわち、かつてここに麦畑や家庭菜園があった頃の植物社会に戻ったということを示していま

す。オヒシバ・カヤツリグサ・ハキダメギクなどの優占する、まさに絵に描いたような、決まり切った畑地雑草群落の姿を、そこにとらえることができます。この種の植物群落は、人間による定期的な耕起・施肥がなされる人工的な環境下にもみ成立し、その意味ではそこに植えられる作物とまったく同じ条件のもとに置かれているため、作物と競合して当然であり、作物だけを生かしていこうとすることはきわめて困難です。雑草というものと気長に付き合いつつ、除草という物理的手段をもって、雑草のみを選択的に除去していくほかに手はありません。

いくつか注意点を指摘しておきましょう。雑草仲間の筆頭に位置づけられるオヒシバという植物は(写真参照)、まことに厄介なナンバー・ワンの悪役で、深く広く根を張りますから、抜くのに大変骨が折れます。抜けたにしても大きく土が掘り起こされるので、稲の根にも悪影響を及ぼします。小さいうちに除去するのが一番でしょう。大きくなったら、もはや手遅れです。次にカヤツリグサですが(写真参照)、稲の苗によく似ていてまぎらわしく、判断がつかないので残しておいたものが大きく成長してしまい、あとでびっくりす

るということがよくあります。稲と見分けがつかない時は、茎の断面をよく見てみましょう。断面が三角形をしていればカヤツリグサ、円形であれば稲です。また、稲よりも葉の色が濃い緑色なので、慣れれば見分けがつかず、たとえ見逃して大きく育ててしまったにせよ、カヤツリグサは根が浅いので簡単に抜け、楽に除去できますから大丈夫です。抜く時には、稲の苗の根を傷つけないように気を付けましょう。次のハキダメギクは(写真参照)、大量に群生するので厄介ですが、茎をちぎってしまえばもう生きていくことはできません。その次のスベリヒユも(写真参照)も根がよく張り、なかなか抜けませんが、畦かきや鎌で根を切ってしまうえばよいのです。地を這う植物ですので、稲との競合関係はあまりありません。見逃したにせよ、大きな打撃はないので、放っておいてもかまいません。

雑草の生態は、種ごとにそれぞれ異なります。それをよく理解したうえで対処していけば、効率的な除草ができますので、以上のことからをぜひ頭の片隅に置きながら、作業に当たっていただければよいと思います。これからの炎天下の季節、マスクをつけながらの野外作業は大変きついですけれども、みなさん頑張ってください。十分な水分補給も忘れずに！。

●播種後 50～80 日目の標準生育状況

種まきから 50～80 日後の赤米稲の標準生育状況を、品種ごとにここにまとめておきますので、参考にしてみてください。苗の草高の計測値は、mm単位で示されています。表中には、成長のよい株を 10 株ほど選び、その最大値・最小値・平均値を、計測して表してみました。

[播種後 50 日目 (6/24) の生育状況]

品種名	最大値	最小値	平均値
馬種	574	496	420.9
種子島種	612	518	572.2
総社種	570	498	535.9
武蔵国分寺種	700	558	625.7
長野トウコン種	518	469	487.1
ブータン種	579	493	478.7
ベニロマン種	623	594	608.5

[播種後 60 日目 (7/4) の生育状況]

品種名	最大値	最小値	平均値
対馬種	642	612	630.2
種子島種	623	595	611.7
総社種	626	553	587.3
武蔵国分寺種	765	709	722.9
長野トウコン種	560	519	534.5
ブータン種	640	589	614.7
ベニロマン種	640	585	615.5

[播種後 70 日目 (7/14) の生育状況]

品種名	最大値	最小値	平均値
対馬種	768	719	738.9
種子島種	752	669	712.3
総社種	735	683	702.3
武蔵国分寺種	975	793	846.5
長野トウコン種	690	598	632.3
ブータン種	791	675	657.3
ベニロマン種	773	712	730.3

[播種後 80 日目 (7/24) の生育状況]

品種名	最大値	最小値	平均値
対馬種	901	823	871.3
種子島種	840	784	814.1
総社種	859	758	813.2
武蔵国分寺種	990	883	925.5
長野トウコン種	742	673	700.8
ブータン種	890	811	833.4
ベニロマン種	880	793	834.3

おたより

●アオコが発生（高橋寿子）

今年は人にとっても、我家の赤米にとっても、困った年となりました。バケツの中にアオコが発生し、『赤米ニュース』の御指導のように水を替えたり、中干しをしたりしましたが、ついに稲がだめになってしまいました。プランターや鉢の稲は今のところ大丈夫です。先日、谷保天満宮の南にある田圃まで散歩がてら見にいき、そこでも緑の草（？）が水面に浮いていました（7/15：東京都国分寺市）。

小学生のための赤米講座(Ⅲ)

長沢 利明

2 赤米ってどんなお米？・つづき

大昔の赤米ごはんのまねをして、今の赤いごはん、つまり赤飯というものが生まれたらしいのです。そうだとすれば、東南アジアの人々も、私たち日本人も同じことをやっているわけで、お祭りとかお祝いとかの時には、赤い色をしたごはんをみんなで食べて、喜びの気持ちをあらわしてきたことになります。それはとても、興味深いことではなかったでしょうか。

とても残念なことに、今から100年前くらいの時代には、もう日本にはほとんど赤米がなくなってしまって、そんなお米が日本にもあったのだということすら、すっかり忘れ去られてしまいました。それでも昭和時代頃までは、東北とか九州とかの農村のかたすみにごくわずか、赤米稲は細々と生き残っていたのですが、今ではそれももうすっかり見られ

なくなっていました。

そんな時、何と西日本の3ヶ所の神社に、大昔から伝えられてきた赤米が、奇跡的に生き残っていることがわかったのです。いったい、どうして神社なんかには赤米があったのでしょうか。それは、神社にまつられた神様にめしあがっていただくための神聖な稲を、神様用に用意された特別な田んぼで栽培し、そこで収穫されたお米を秋祭りの日に、神様にささげるといふ特別な儀式が、長い間続けられてきたからなのです。何しろ神聖なお米ですから、私たちが毎日食べているような普通のお米ではだめなのです。神様用の特別な稲というものがあるって、その種子を特別な田んぼにまき、秋に収穫して、その種子の一部を次の年にまた田んぼにまいて育てるといふことを、何百年間も、もしかすると1000年以上も続けてきたかも知れないのです。

だからこそ、いっさい品種改良のなされていない、大昔のままの稲がそのまま残され、伝えられてきたわけで、それは白いお米が登場する前の時代の古い赤米稲のまま、それが保存されてきたのです。これは本当にびっくりするようなことで、まさに奇跡といつてよいと思います。（つづく）

【表紙解説】東京の祭り⑨—芝神明のだらだら祭り（港区）

港区芝大門の芝大神宮は、「芝神明」の通称で親しまれている。歌舞伎の「め組の喧嘩」は、江戸の鳶職仲間と相撲取り連中との喧嘩を描いているが、それは文化2年（1805）にこの神社の境内で本当い起きた。芝大神宮の例大祭は、9月11日～21日の十日間おこなわれるのが江戸時代以来の伝統で、日本一長い祭りといわれている。あまりに長期間、祭りがだらだらと続くので、俗に「だらだら祭り」と呼ばれてもいる。